

人は何を誇りとするのか？——無神論、有神論？

Greatchain

2019/09/13

『神仮説の復帰』*The Return of God Hypothesis* などで話題になっている、スティーヴン・マイヤーなどを先頭とする、インテリジェント・デザイン運動を、どう考えてよいのかわからないと言う人々のために、私の考えを少し述べてみたい——「なるほど、そういうことだったのか」と、一人でも多く納得していただけるように。

まず、ID の前提として、「宗教と科学が対立するのではなく、無神論科学と有神論科学が対立するのであり、有神論は（特定の）宗教と同じものではない」という前提がある。躓く人はここから躓くだろう。これはどういうことなのか、実例を用いて説明しよう。

前にも書いたことだが、数十年前、日本のある留学生が外国で、「あなたはどのような宗教に属しているのか？」と訊かれた。すると彼はむっとして「私は無神論者だ！」と答えた。彼がむっとしたのは二重の誤解に基づいている。第一に、そういう質問をした人は、世界はキリスト教とか、イスラム教とか、いくつかの大きい宗教圏に分かれていて、基本的には大きな違いはないはずだが、あなたはその中のどこに属するのか、と聞いたのだろう。無神論文化圏というものはないから、彼はその答えに驚き、何を怒っているのか、わからなかったかもしれない。この留学生にとっては、宗教はどの宗教でも迷信であり、したがって、迷信を信じているように言われて腹を立てたのだろう。宗教の教えの中には、迷信もあれば馬鹿げた教えも含まれるかもしれない。しかし各宗教の共通の立場としての「有神論」という概念は、ただ一つのことを指している——すなわち、この世界には、人間を超えた、我々の存在を基礎づける存在があり、見えない次元が存在し、死後は何らかの意味でその存在次元と関わる、という常識である。これは迷信などではない、古今東西の各民族が直観で知っている常識である。

もう一つの誤解は、無神論（唯物論）科学だけが、唯一正しい、中立の真理を追究する方法だという信念である。この誤解は、特にわが国では顕著に、学界とメディアの共同作戦（必死に ID に目をつぶらせる作戦）によって、当然の常識のように浸透している。

しかし、我々の存在を基礎づける存在（＝神）を迷信と考え、知能の低い者たちの考え出しものとする、いわゆる無神論者が、自分たちは神より偉いのだ、物質から生物をつく

ることができるのだと言って出てきた。この者たちは、自分たちの方が、(物理化学はいざ知らず)物を深く考える上で、より知能が遅れているのかもしれないとは、考えてみたこともなかったであろう。彼らは、唯物論者・無神論者でない者を、ただひたすら攻撃した。理由は、大阪弁で言う「けったくそ悪い」からにすぎない。理由など考えない。よく考えてみるがよい。

もし、あの日本の留学生に質問してきたような西洋人が、「あなたは、あの物質から生命を作るといふ、すばらしい科学者のお仲間ですか?」と訊ねてきたら、あの留学生のように、「失礼なことを言うな、私はそういう〈馬鹿な西洋人〉の仲間ではない」と、(岡潔氏を引用して――前記事)言うべきである。

「それは迷信であるから間違っている」とは言える。「それは有神論であるから間違っている」とは言えない。神とか愛とかいう、我々の心を大きく占める存在は、目にも見えず数量化もできないから存在せず、間違っている、とは言えない。日本語には、どうしても英語に訳せない「生かされている」という言い方がある。これは、日本語であるがゆえに間違っているか? 実はこれは、この宇宙は初めから人間を**生かす**ために、すべての条件が絶妙な数値によって微調整されているという事実を、言い表すすぐれた日本語である。これを認めたくない(要するにケッタクソ悪い)科学者が大勢いて、多宇宙(multiverse)仮説(=宇宙ダーウィニズム)という言い逃れをして、物笑いの種になっている。

私は、科学と宗教を統一する、人々に待望されたはずの、インテリジェント・デザイン(ID)という理論が出たとき、世界の人々は大歓迎すると思っていた。私の友人である Jonathan Wells も、すぐにも世界は変わるだろうと言っていた。しかし思いもよらぬ猛反対があり、今でもそれが続いている。これは、ペドフィリア文化という途方もないものが、直ちに報道され、直ちに悪が暴かれるだろうと思っていたのに、それがタブーとして隠蔽されているのとよく似ている。共に、神と悪魔の闘争であるが、神も悪魔も「迷信」中の迷信として存在しないことになっているから、悪魔側にとって実にうまくいっている。

唯物論とかダーウィニズムとは、人間の脳みそ以外に知性の存在する場所はない、人間がこの宇宙で一番賢い、という思想であるから、これは昔から人間が戒められてきた、傲慢の罪(ヒュブリス)を犯すことである。最近、我々はサタンというものが実在することを知るようになって、このことがよくわかるようになった。この者たちにしてみれば、神がのさばり出てきたら、大ごとにならないうちに殺さねばならない。我々の住む世界は、あきらかに病み歪んでいる。まさかということが多すぎる。その「まさか」の一つである、サタン主催のロンドン・オリン(パラリン)ピックを、来年の東京オリンピックは、くれぐれも真似しないでいただきたい。最もやすやすと、西洋の無神論を、正しい科学(または常識)として受け入れるのが、日本であることが統計上わかっている(前記事)。

もう一つ、ついでに、この学問世界がいかに狂っているかの驚くべき例を示そう。ダーウィニズムの世界では、比喩として、何百万匹のサルが何万年もの間、タイプライターを叩き続けていれば、シェークスピアの完全な作品ができるはずだ、と主張している(多宇宙説も同じこと)。これは我々には、冗談なのか本気で言っているのか、わからないのだが、その分野の専門家にも、それはわからないらしい。そこで、我々には正気とは思えない実験を、英プリマス大学の研究者チームが、ペイントン動物園を借り、6匹のマカク(ニホンザル)と1台のコンピューターを使って始めた。サルたちはキーを盛んに叩き始めた。その経過と成果は、学術論文として発表されているが、それは省く。「彼らの創作意欲はどうやらシェークスピアには劣る」ということらしい。サルたちは、最後にはコンピューターに小便をかけて壊してしまった。

こんなことを実験してみようと、正気の学者に思わせるということは、それだけの真剣な雰囲気があるということだろう。またこれは、その実験を認可する人々がいて、わずかでも予算を与えたということであろう。このチーム自体は、どう考えていたのかわからない。しかし、ひょっとしたら、自分たちがあえて馬鹿を演じて、学界の馬鹿さ加減を暴くという目的だったかもしれない。

——以上